

仏の放光と蜘蛛の糸

—ポール・ケイラスの原作に日本の絵師が重ねたイメージ—

長尾 佳代子

2005年10月31日受付

Rays Shed by Buddha and the Spider Web

*A book illustration was made
under the influence by old Japanese Buddhist tradition of drawings*

Kayoko Nagao

Abstract

The Spider-web, the 4th story of Paul Carus' *Karma*, is the work that Ryunosuke Akutagawa (芥川龍之介) adapted for his *Kumonoito* (蜘蛛の糸). The idea of "Salvation In The Hell" as described in the 47th chapter of *Zeng-Yi-A-Han-Jing* (増一阿含經) is not implemented there, which makes it most improbable that this famous children tale is based on the ancient Buddhist narrative pattern.

Publishing *Karma* in Japan was accompanied by using crepe papers and adding numerous illustrations, couple of which, Carus used again in his another work. Those two illustrations made by a Japanese painter Kason Suzuki (鈴木華邨) according to Carus' requests well reveal his perception of Buddhism.

In relation to the Tokyo edition of *Karma*, I argue about illustrations derived from typical Japanese Buddhist paintings and refer to recent research on crepe-paper books (ちりめん本). My work on these points has brought us better understanding on Carus' inside.

On one hand Paul Carus expressed sympathy for Japanese culture, but at the same time he was an unbiased observer. Although he was interested in Japanese Buddhism, it didn't change his point of view that led him to create a unique book -- *Karma*.

はじめに

ポール・ケイラス (Paul Carus, 1852.7.12-1919.2.11) の *Karma*¹⁾ という著作を知っている人は少ないだろう。「芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の原作だ」と言えば、逆に、「まあ、『蜘蛛の糸』には原作が

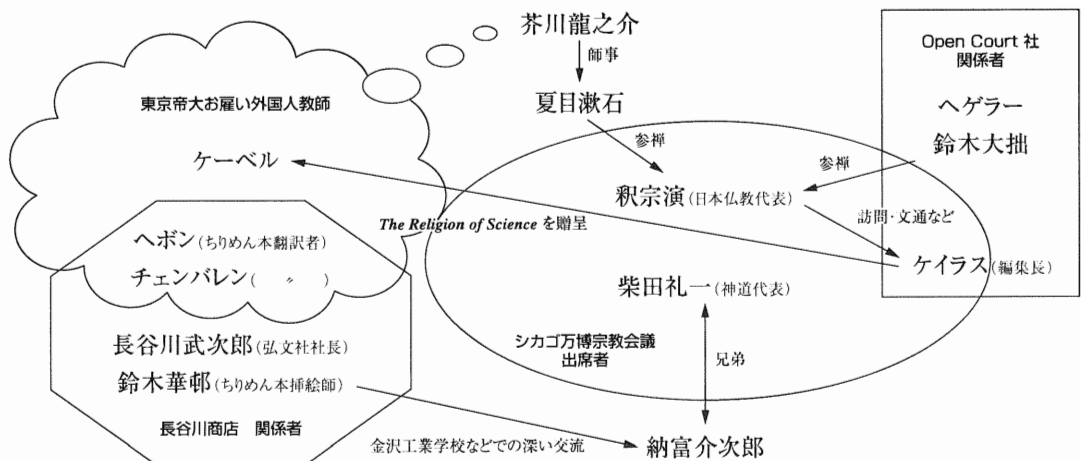
1) 書名 *Karma* はサンスクリットの中性名詞 *karman* の単数主格の形が英語化したものによる。*karman* は動詞 *kr* (「行う」の意味) から派生した語であり、意味は「行い」。漢訳の「業」は「業が深い」などの形で日本語でも知られている。ケイラスの著作 *Karma* は善悪の行為とその結果としての善悪の報いを説くものである、このような書名にしたのである。

あったのですか?」と驚かれることが多い。実際、芥川の『蜘蛛の糸』が発表直後から高い評価を受け、小学校の教科書等に採用されている一方、英語で書かれたこの原作も、芥川作品の直接の典拠となったその日本語訳『因果の小車』も、日本では、永い間気付かれぬ存在であった。

【資料1】年表

- 1852.7.18 ポール・ケイラス、ルター派牧師の息子としてザクセン王国に生まれる
- 1856 エドワード・C・ヘゲラー、フライブルクの学校を卒業し、アメリカに渡る
- 1859 ダーウィン、『種の起源』を発表
- 1871.1.18 ドイツ統一
- 1873-75 ビスマルクの文化闘争。教会及び宗教学校への監督、統制の強化
- 1876 ケイラス、チュービンゲン大学で Ph. D. を取得
- 1884/1885 ケイラス、アメリカへ渡る
- 1885 ケイラス、『*Monism and Meliorism*』を出版。ヘゲラーの目にとまる
- 1887 ヘゲラー、『*The Open Court*』を発行。後にケイラスもその編集に加わる
- 1893 シカゴ万国博覧会に際して、世界宗教学会議が開催される
ケイラス、『*The Religion of Science*』を出版
- 1894 ケイラス、『*The Gospel of Buddha*』を出版
また、『*The Open Court*』に創作仏教説話 *Karma* を発表
- 1895 *Karma* の単行本を長谷川弘文社から印刷、販売
鈴木大拙、『*The Gospel of Buddha*』を翻訳（『仏陀の福音』）
- 1896 *Karma* 第2版を発行
- 1897 *Karma* 第3版を発行
- 1898 鈴木大拙、『*Karma*』を翻訳（『因果の小車』）
- 1900 ケイラス、『*The History of the Devil and the Idea of Evil*』を出版
- 1918 芥川龍之介、雑誌『赤い鳥』に「蜘蛛の糸」を発表

【資料2】人物関係図



芥川龍之介研究における *Karma* 発見の経緯やその評価については、別に詳しい研究もあり、筆者も以前に書いたことがあるので、ここには繰り返さない（長尾2003b、山口等参照）。今回の論考では、19世紀末に仏教に興味を抱いたアメリカの哲学者と独自の宗教的環境の中に生きる日本の仏教者、商人、職人といった人々の交流、文化の違いを超えた共感と超えがたい壁について、この *Karma* という著作を通して叙述してみたい。

かつて山口静一はケイラスの『『カルマ』の物語』を論じた際に、仏典から採られた可能性を探ろうとして、『増一阿含経』に見られる話に言及することがあった（山口）。本稿では、まず、『増一阿含経』巻47を例に「地獄における救い」の問題について説明することからはじめたい。*Karma* は初期の仏教説話を装った創作である。芥川『蜘蛛の糸』ではこの原作 *Karma* の記述を大きく改変しているが、従来この点に関してはあまり重要視されない傾向があった。しかしながら、この箇所は原作者ポール・ケイラスの思想の傾向が大きく現れている箇所であり、芥川の改変が意識的なものだったかどうかを検討することで、芥川文学の解釈にも新しい視点が導入されるだろう。次に、*Karma* 出版の経緯に関連のあった人々の動向について述べる。単行本 *Karma* の出版には印刷製本を行った長谷川武次郎をはじめ、複数の日本人が深く関わっている。この点に関して、現在判明していることを整理しておきたい。さらに、ケイラスが著書の挿絵として利用した日本の絵画の例を2つ示し、彼の仏教解釈の特徴を示す。また、挿絵を提供した鈴木華邨^{すずきかてん}について、この技量優れた画家がケイラスの要請に応じてどのような仕事を行っていたのか。この点にも言及して解説したい。

Karma 成立に関する歴史的な事象をたどる際に絵画や文献資料の解釈を利用した点が本稿の新しい試みである。欧米で広く読まれ宗教学研究の間では知られていながら日本文学の研究者にはこれまであまり参考とされることのなかったケイラスの著書、*The Religion of Science* と *The History of the Devil and the Idea of Evil*（以降 *The Devil* と略す）の2書の内容およびちりめん本に関する一連の研究を参考にすることで *Karma* の成立事情に関して新しい知見が得られた。判明しない事実も多く残り、また、筆者の思い込みや誤解による誤謬も生じているかもしれないが、拙稿が他の専門家からの情報提供を得るきっかけとなることを期待している。

1 「奇跡を起こして地獄の衆生を救う」話が避けられた理由

「極悪人のカンダタが地獄で一本の救いの糸を発見する。それは彼が生前に救った一匹の蜘蛛の糸であり、カンダタは一心に糸をよじ登って行く。しかし、その途中、彼は下から同じ蜘蛛の糸を登ってくる数限りない罪人たちを見つけて、『おりろ。おりろ。これは俺のものだ!』と叫ぶ。その瞬間、細い蜘蛛の糸はぷつんと切れて、カンダタはまた地獄に落ちる」という内容の英文の物語が日本でも発見された。ポール・ケイラス著 *Karma* の中の一挿話 *The Spider-web* である。これで、芥川『蜘蛛の糸』の出典探しにようやく決着がついた。実際には芥川の使ったものはこの *Karma* の鈴木貞太郎（大拙）による日本語訳であったが、大拙の訳は原文にかなり忠実であったので、英文の内容を検討すれば原典と翻案との比較をすることが可能であった。ところが、せっかく発見されたこの原作自体は研究者の間であまり検討されることがなく、日本での関心は『『因果の小車』以外にも芥川の使ったタネ本があったのではないか』という問題に移り、少なくともラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）の採集した民話ではないことが判明した（宮坂）が、「仏教経典が原作ではないか」という疑問はくすぶ

り続けた。ケイラスの原作については1893年のシカゴ万国博覧会に際して行われた世界宗教会議においてヴォルコンスキー（Sergei Volkonskij, 1860-1937）が聴衆に紹介した「人參につかまって地獄を脱出しようとするお婆さん」の話が下敷きになったという指摘もなされた（Fullenwider）が、これはケイラス自身が否定している²⁾。

まず、結論を先に言えば、The Spider-web の挿話はケイラスのオリジナルであって、仏教經典に基づくものではない。なぜかを一言でいえば、仏教の教義において地獄で責め苦にあっている衆生がその場で救われることはないからである。

こう書くと、「では地藏菩薩の救済はどのようなのですか」「目連救母伝説は？」という反論が出てくるかもしれない。このような物語には、地獄の苦しみから救われる次第が語られている。しかし、これらはインドに遡る話ではない。ケイラスが *Karma* 第2版に付した副題である「初期仏教の物語」（The story of early Buddhism）ではないのである。この副題の鈴木大拙の邦訳『因果の小車』（すなわち、「行為とその報いについて説く小乗仏教」の意味）もケイラスの意図を忠実に示している。1894年にケイラスが出版した仏教綱要書 *The Gospel of Buddha* は彼の自信作であり、また、日本やスリランカなどの仏教国で高く評価されたが、その一方、欧米の文献学者からは使用した文献の部派的系統、あるいは地理的系統の位置づけがあいまいであるとして厳しく批判された（Estlin）。チュービンゲン大学で学位を取った文献学者であるケイラスはこれにいたく自尊心を傷つけられ、その後の著作では学識を疑われることのないように気をつけていた形跡がある。さらに、彼は1894年に発表した論文 “Buddhism and Christianity”（仏教とキリスト教）では「小さな乗り物」（小乗、hīnayāna³⁾）「大きな乗り物」（大乘、mahāyāna）「大きな橋」（mahā-setu）という名称で宗教の救済を分類している。要約すれば、彼は「大乘仏教は幼稚な比喩や妄信を説いているようだが、他を侵略して民を苦しめる暴虐野蛮な中央アジアの人民に慈悲の精神をもたらした点で初期仏教よりも進化したものと言える。しかし、そういう意味でもっとも進化しているのはキリスト教でありこれを『大きな橋』とたとえることができる（下線は長尾）」と述べるのである。したがって、彼は「初期仏教の物語」と名うった童話に「阿弥陀さま」や「お地藏さま」を登場させることを注意深く避けている。しかしながら、「地獄にいる衆生（the demon suffering in Hell）」が蜘蛛の網をつかんで登る（take hold of the web and climb up）という設定自体はやはり異様であり、下から上への空間移動で苦しみの世界から脱出するというプロットは仏教經典ではあり得ない。これはシカゴ万博の時にヴォルコンスキーから聞いた地獄に落ちた意地悪お婆あさんの話が彼の潜在意識に残り、創作活動において浮かんで出てきたのであろう。

さて、このエピソードに関する漢訳仏教經典の参考資料として研究者が言及した例には『増一阿含經』がある。ちなみに、この『増一阿含經』の例は今までに中途半端な形でしか示されたことがないのでここに出典箇所とその要約をあげておきたい。例えば、山口静一は「増一阿含經という仏典には、仏陀に放逐されて地獄に墮ちた悪鬼提婆達多に対して、仏陀の弟子が教えを説きに行く話がある」として、注に「大正新修大蔵經第二卷」とだけ記している（山口、p. 27）。このエピソードは、『増一阿

2) ケイラスがこれを直接の材源としたのではなく、無意識下に沈んだ記憶が彼の創作に影響を与えたことについては、小林（2005a、2005b、2006）を参照。

3) 正しい綴りは hīnayāna である。

含経』の第47巻の中にあり、『大正新修大蔵経』（以降、『大正』と略す）で言えば、第2巻の p. 804 から p. 806 にかけて書かれている。阿含経典は周知のように初期仏教経典の古い漢訳だが、しかし、この箇所は対応するパーリ経典の *āṅguttara nikāya* に対応がなく、したがって、欧米の言語にも翻訳されていない。ケイラス著 *The Gospel of Buddha* の参考文献表などを見ると、彼の参照している資料は原典ではなく全て欧米の言語への翻訳である。しかし、その中でも漢訳仏典からの翻訳はサンスクリットやパーリ語からのものと比べてごく少ないことがわかる。ケイラスには漢訳仏典そのものは読めなかった。したがって、次にあげる資料を彼が目にしたとすれば、翻訳、重訳を経てのことになるが、実際のところ、その可能性は極めて低だろう。

生きながら地獄に堕ちたシャーキャムニ・ブツダの従弟デーヴァダッタが墮地獄の直前に懺悔の心をおこし「[私は] 帰依します、ブツダに（南無一仏）」と言おうとしたが「[私は] 帰依します（南無）」までしか言えなかった。しかし、それだけでも功德が絶大であったので、地獄で悪業の報いを受け終わった後は天界人界に生まれ二度と地獄には堕ちないことが決定した。シャーキャムニ・ブツダからそのことを聞いた弟子のマウドガリヤーヤナが地獄へ行ってこれをデーヴァダッタに伝えたので、聞いたデーヴァダッタは歎び、地獄の苦しきも減じた。マウドガリヤーヤナは神通力によって「『ブツダに帰依します』と称することによって諸々の苦悩は除去される」という偈を説いた。それを耳にした六万余人の地獄の衆生の悪しきカルマは焼き尽くされ、彼らはそこでの命を終えて四天王として生まれ変わった。

（『増一阿含経巻第四十七』『大正』 vol. 2, pp. 804-806 の要約）

マウドガリヤーヤナがデーヴァダッタに伝えたのはブツダの教えではなく、ブツダが予言した彼の来世である。このような「予言を伝える話」は「授記物語」という仏教説話の典型で、大乘仏教の経典ではさらに発展を遂げるものである。また、仏の名号を唱えることの効果について述べられている点も注目されよう。『増一阿含経』自体が、大乘仏教的な解釈による潤色の多い漢訳経典として知られているものであるが、この箇所もまさにそのような特徴の色濃く現れている部分だと言える。*Karma* の執筆に際して、あえてジャータカなどのパーリ語の初期仏教経典のような装いの物語に仕上げることを意識していたケイラスがわざわざこのような仏典を材源として利用したとは考えられない。

ケイラスの物語では、ブツダが放った光が地獄へ届く場面があり、これは仏教の伝承を受けたものである（長尾2003b）。しかしながら、地獄で苦しむカンダタが蜘蛛の糸を伝わって救出されるなどという展開は、仏教の伝承と相容れない。「仏の放光」に「蜘蛛の糸」が続く物語は、ケイラスが独自に考え出したものである。

膨大な仏教文献の中からケイラスがあえて使った材料は無秩序に選ばれたものではなく、彼の思想的な立場を反映している。ギリシャ語、ラテン語文献を古典としキリスト教文化を背景に持つ者としてのケイラスがなぜ *Karma* という著書を出版したのか、それが当時の日本や欧米の出版界にとってどういう意味を持っていたのか、ということ調べていけば、彼がこのような特異な著作を出版した真の動機がわかってくる。ケイラスが主宰した雑誌 *The Open Court* や *The Monist* はそもそも世界の文化・宗教を研究して宗派宗教を超えた真実を追求しようという動機から編纂されたものであり、創作仏教説話 *Karma* はその活動の一端から生み出されたものだったからである。

2 真理を求めてアメリカに渡った哲学者

ケイラスはルター派牧師の息子として統一前のドイツ、ザクセン王国に生まれた。彼の父親は東西プロシアの国立教会の総監督職になったというのだから、その方面では相当に高位に登ったと言えるだろう。しかし、ケイラス自身はそのような教会の権威に対して疑念を抱いていた。彼はチュービンゲン大学で学位を取得後、ドレスデンで士官学校の教員となったが、聖書の新解釈を示した彼の著書が勤務校の宗教的な立場と相容れなかったために教職を去り、アメリカに渡った。ケイラスは、ここで彼より20年あまり早くアメリカに移住しすでに亜鉛の加工業で財を成していた富豪ヘゲラー (Edward C. Hegeler, 1835-1910) と出会った。

ケイラスの考え方はシカゴ万博の年、1893年に出版された著書 *The Religion of Science* にはっきりとわかりやすく示されている。ケイラスは科学的鑑識眼に耐える新宗教、科学的宗教 (the religion of science) を確立したいと考えていた。その際、これに立脚する人々はもともと持っている信仰を捨てる必要は全くなく、従来の宗派宗教の思想を点検、洗練して迷信的なものを取り除き合理的なものを保存し、その共通に含有する真理を追究すればよい、とした。

The Religion of Science の序文でケイラスは「祭壇とサクラメントはこの国の最悪の偶像である」と述べた後、次のように言う。

科学的宗教は、そのみが科学に矛盾するようなわが教会の偶像崇拜と異教的精神に抗言 (protest) するものとなろう。
(*The Religion of Science*, preface, pp. 4-5)

ケイラスはまた、「天文学が占星術から発展したように、化学が錬金術から発展したように宗教も進化して科学的宗教となるのだ」という信念を抱いてもいた。このような彼の思想は日本でも注目された。この著書は1899年に長谷川天溪によって『科学的宗教』という書名で翻訳され、姉崎正治の校閲のもと出版されている。凡例によれば、長谷川は1896年の夏ごろ当時東京帝国大学のお雇い外国人教師であったケーベル博士 (Raphael von Köber, 1848-1923) から著者献呈本を借りたと言う (pp. 1-4)。この年はケイラスが *Karma* の第2版を出版した年であり、この頃にはケイラスと東京帝大の外国人教師との間になんらかの交流があったということになるが、それがいつに始まるものなのかはよくわからない。それに先立ち1886年からヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911)、チェンバレン (B. H. Chamberlain, 1850-1935) やラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) などの来日外国人教師たちが長谷川商店のちりめん本の日本昔話シリーズの翻訳を引き受け、成功を収めていた⁴⁾ ので、ケイラスがシカゴの万国博覧会をきっかけに長谷川商店と接触を図った背景には東京帝国大学に関連するこのような人脈があったのかもしれない⁵⁾。

-
- 4) 長谷川商店の出版活動に関して多くのお雇い外国人教師が翻訳者、執筆者として活躍していたことについては、石澤小枝子『ちりめん本のすべて』に詳しい。筆者は *Karma* 出版の経緯を詳しく紹介するシャーフの著書の存在をこの著書を通じて知った。
- 5) たとえば、東大医学部創始期の功労者、医学者、人類学者として知られるベルツ (Erwin Bälz, 1849-1913) は17歳で高校を卒業した後、チュービンゲン大学で6学期を済ませ、基礎医学を学んだ。その後ベルツはライプチヒ大学に移るが、このような大学遍歴はドイツ人学生に一般的なことであり、同様の遍歴を行ったケイラスが、その間に、ケーベルをはじめとする後に日本のお雇い外国人教師となるような人々と知遇を得た可能性は十分に想像のできることである。

3 シカゴ万博での出会い

1893年にコロンブス大陸発見400周年を記念して開催されたシカゴの万国博覧会は、ホワイト・シティーと呼ばれるパビリオン群と大観覧車によって、「アメリカがヨーロッパを越えた」ことを示威した。鈴木大拙訳『因果の小車』に跋文を寄せている後の鎌倉円覚寺管長、釈宗演（1859-1919）はこの万博に際して行われた世界宗教会議で日本の禅を紹介した。これがきっかけでケイラスは宗演をシカゴ郊外のラ・サールにあるヘゲラー邸に招く。ケイラスはこの時にはヘゲラーの娘マリーと結婚していた。ヘゲラーは新時代新天地にふさわしい自由で普遍的な宗教が必要であるという考え方においてケイラスに共感しており、そのための情報交換を目的とする雑誌 *The Open Court*（公開の法廷）の編集を彼にまかせていた。この出版を行ったオープン・コート社は宗教思想関係の書物を出版する老舗の出版社として、現在でも *Karma* の増刷を続けている。のちに鈴木大拙も職務に励んだその編集作業はこのヘゲラー所有の豪邸の一階で行われた。*The Open Court* は豊富な挿絵や図版を含む魅力的な雑誌であり、逆に、このような特徴からこれを通俗雑誌のように考える日本の研究者もいるようであるが、それは誤解である。この時代にこのような視覚的な印刷物を週間、あるいは月間で次々と出版したオープン・コート社は印刷に関して非常に高い技術力を持っていたといえる。これはヘゲラーのそもそもの事業が亜鉛の加工業であることと密接に関連しているだろう。また、内容としては、執筆陣に一流の学者たちをそろえ、校正や印刷も丁寧であった。

ヘゲラー邸を訪れた釈宗演は、亜鉛加工品の工場を見学し、その規模の大きさに感心する。ヘゲラーは僧侶たちをもてなして精進料理を用意したりもする。しかし、これらのことをもってヘゲラーやケイラスが仏教に特別に傾倒したと考えるべきではない。ケイラスはその当時確かに日本の大乘仏教が宗教のあり方としてはかなり進化した形であるとみなしてはいた。しかし、その意図があくまでキリスト教的な文化背景を持ったまま真理を追究することにあつたことは、第2項に述べた通りである。そのために仏教、道教、ヒンドゥイズム、ユダヤ教などありとあらゆる世界中の宗教を比較研究していたのである。ところが、当初、キリスト教信者たちに果敢にも戦いを挑もうという意気込みで世界宗教会議後に臨んだ釈宗演は、意外にもケイラスと意気投合した。鎌倉円覚寺で修行するかたわら3か年にわたって慶応義塾で洋学を学んだ釈宗演は、塾のお雇い外国人教師たちが西欧諸国の博士として学問を教授するかたわら巧みに外教、耶蘇基督教を布教しているといつて憤っていた⁶⁾。ところが、「科学的宗教」を標榜するケイラスに対してはそうした敵対心を持たなかったのである。

釈宗演とケイラスの友情はさらに深まり、とうとう宗演は当時寺に出入りしていた学生、鈴木貞太郎（大拙、1870-1966）をアメリカに送り出す。鈴木は、ヘゲラーのもとに行けばダルマ・パーラに会ってスリランカに留学できるつてが出来るかもしれないと思ってアメリカへ行く⁷⁾。1897年2月のこと

6) 「…現に本塾の雇教師キッチンと云ひロイドと云ひ、皆是外教宣教師にして、而して文明国と称する英米の、大学を卒業したる巖然たる一大博士なり。其れ如是宗旨と學術とを兼備へて、遠く東洋の一隅に來たり、學術を売るの傍ら、宗旨を冥々裡に播布する、其の手段の巧者なる胆力の傍若なる、我輩の実に憤怒する緣由なり。…」(井上 pp. 40-41、長谷川恵徳への書簡)。

7) 一般によく言われている「ケイラスが中国文献の翻訳の助手を求めて大拙がそれに応じた」といういきさつは大拙自身の思い違いである(西村参照)。

である。しかし、大拙の希望はかなわず、彼はここでいつ帰国できるあてもなく数々の著作をなしていくことになる。そして、日本人である鈴木大拙自身は「禪の境地として体得する真理は言葉によって伝えることが出来ない」と考えていたにも関わらず、あくまで文献の歴史的研究によって真理を追究しようとしていたケイラスのもとで、ZEN を英語で説明する本を書き続けることになるのである。

4 ケイラスの著書に引用された「日本の絵画」

1 生死輪

さて、ケイラス家の大きな赤ちゃんを膝に乗せて笑みを浮かべる若き大拙の写真 (Henderson, p. 85) を見るかぎりでは、二人の当初の關係にギクシャクしたものがあつたようには見えない。しかしながら、その後、日本の友人にあてた手紙の中で大拙は何回となく雇用主ケイラスに対する不満をこぼしている。そのほとんどは金にからむ問題であり、大拙は「ケイラスはけちだ」と言う。しかし、大拙の不満はさておき、Teitaro Suzuki との連名での『太上感応篇』の出版や大拙渡米後数年間に集中的に発表された数々の中国思想に関する論文などの業績から、大拙英訳、ケイラス校閲の仕事が順調に進められたことがわかる。

前にも挙げた1900年に出版されたケイラスの著書 *The Devil* は魔神崇拝を特徴とする宗教の原初形態からはじめて、古代エジプトの信仰やゾロアスター教、ブラフマニズムや仏教の教義における「悪」の概念について説きおこし、初期キリスト教やグノーシス派などの異端、魔女狩りの歴史について詳細に論じつつ、最後に「悪魔」の哲学的な解釈を行う長編である。資料3はその中の「仏教」の章の挿絵である。ここでケイラスはヒンドゥーとチベットの生死輪に加えて「日本の生死輪」を紹介しているのである。「ブッダのニルマーヤ・カーヤ (nirmāya kāya, 化身)」について、ヒンドゥーの図案では6つの境涯の1つずつに遍在するものとしてそれぞれの区画の中に1つずつブッダが描かれているが、日本の五趣生死輪では、あらゆる場所にブッダが遍在するということが図の中心にブッダを描くことで表現されている、と彼は説明する。この絵解きは大拙の説明によつたのだろう。ケイラスはこの挿絵が別の原本をもとにして作成された複製であることを明記しているが⁸⁾、その原本である Adolf Bastian (1826-1905) の著作と比較してみると、中に書かれている怪しげな「漢字もどき」が注意深く削除されているのがわかるからである。*The Devil* は350点もの挿絵を含む500頁近い書物であるが、その中に写真印刷はわずかしがなく、あっても多くは彫刻の写真である。ケイラスは絵画資料を写真に撮るよりもむしろ描きおこさ

【資料3 *The Devil* より生死輪】



A JAPANESE WHEEL OF LIFE. (Reproduced from Bastian.)

8) ケイラスの説明は Reproduced from Bastian とあるのみで (*The Devil*, p. 123) 当初は書誌情報が不明であった。幸い京都大学の Welner Knobl 先生のご教示によってケイラスが参照した著書が特定できたのみならず、Knobl 先生には該当箇所のゼロックスを取り寄せるなどの便宜を図って頂いた。ここに感謝の意を表したい。

せた。それはおそらく当時の印刷技術の問題だったのであろう。原本を書いたバステアンも手元に実物の「日本の生死輪」をおきながらそれを模写させたのであろうか。読めない漢字を正確に模写することはできなかったようだ。

大拙は古今東西の文献資料を比較検討することにはさして興味がなかった。真理は禅定と内観によって自らの中に見出すことができると考えていたので、インド以外の外教の国に真理を求める必要は感じていなかった。釈宗演もシャカムニ生誕の地にあこがれてインド大陸の一部とみなされていた当時のセイロンに留学するが、僧侶たちが禅定をせず托鉢ばかりしているとして幻滅し、宿にこもって座禅とサンスクリット学習ばかりしている。大拙や宗演にとって日本の大乘仏教は、真の仏教精神を具現する最も真正なものであった。一方、ケイラスにとってヒンドゥー、チベット、日本のそれぞれの生死輪は絶対的な基準で取捨選択する対象ではなく、進化していく宗教現象の各時点での遺物であった。そして、クリスチャンとしてのケイラス自身はその流れの外に傍観者としているのではなく、自らの文化もその中のどこかに位置づけようとしているのであった。

「ブッダのニルマーヤ・カーヤ（化身）」について、大日如来とアミターバ（阿弥陀仏）を同一視しているケイラスは次のように説明する。

マンダラという言葉は「完全に具わること」を意味する。それは整然と組織された一群のブッダの化身を示す。ニルヴァーナに住する最高位のブッダの像は常に中心に位置する。それは「ボーディ」（智慧）か「サンボーディ」（完全なる智慧）であり、いわば、真実であり、永遠の正当性であり、あるいはむしろ真理、事実の中に体現する客観的な現実性であり、永久に不変のものである。それは「アミターバ」という名の下に擬人化されるが、その意味は「無量の光」であり、それを認識することでブッダであることが確立されるのである。それはクリスチャンの父なる神のように普遍恒久であり、世界の光と命であり、倫理的な行為の究極の権威なのである。

（下線は長尾。The Devil, pp. 133-135）

禅定者が体験する無量の光のイメージはケイラスにとって何の違和感もなく父なる神の絶対的な権威と同一視されたのである。

2 蜘蛛の糸

さて、資料4「HONO KURUMA, THE CART OF HELL」⁹⁾、資料6「MEIFU, THE DARK TRIBUNAL」、資料8「BUDDHA EXTENDING HIS HELP TO A SUFFERER IN HELL」はいずれも前項の*The Devil*の挿絵である。この3点のモチーフはいずれも我々日本人にとってなじみの深いものであるが、そのことは右側に配した資料5、7、9と比較することで納得されるはずだ。これらはいずれも筆者がたまたま持っていた絵入り『往生要集』のものであるが、様々に流布している『往生要集』普及本の中にはこの挿絵にもっとよく似ているものもあるだろう。図案のモチーフ自体は室町時代以降繰り返し使用されているもので、幕末以後も様々な絵師に好んで描かれた。聖衆来迎寺六道絵から継承した「閻魔王審判」「聖衆来迎図」「火の車」などの定番の図案である。

【資料4】 *The Devil* より火の車



HONO KURUMA, THE CART OF HELL. (After an old Japanese painting.)

【資料5】『往生要集』より火の車



挿絵のうち資料6と資料8はもともと *Karma* の挿絵として提供されていたものの描きおこしであり、もとの絵は鈴木華邨(1860-1919)によるものである。この2点の挿絵は1985年の初版本 *Karma* には登場せず、翌年に出版された第2版にはじめて登場する。この間のいきさつについては、後の項で詳説する。

資料6と資料7を見比べてみれば、華邨が伝統的な図案を *Karma* のためにどうアレンジしたかがわかる。閻魔王審判の図自体は中国に起源があるが、華邨の図案である資料6には資料7と同様に、人の生前の善悪の行為を報告する「人頭幢」が見える。これは日本独特の意匠である¹⁰⁾。これにより、ケイラスから挿絵を依頼された華邨が日本の絵師が得意とする伝統的な地獄絵の図案をもとに、罪びとの服装を異国風にしたたり、その目前に蜘蛛の糸を垂らしたり（この図には描かれていないが、*Karma* 第2版の表紙絵には上方に花びらを載せた蜘蛛の巣とそこから下りてくる蜘蛛が描かれている）してアレンジしたことがわかる。なお、資料4の玻璃の鏡の中にはもとの挿絵には描かれていない映像が描かれているが、これはケイラス側のアレンジかもしれない。もしこの映像がなければ、こうした図案になじみのない欧米の読者には牛頭馬頭の横にある大きな丸いものが鏡であるということがわからないからである。

資料8はカンダタがブッダのメッセージを聞いている図であるが、これも資料9の見仏聞法の図を下敷きにしていることが明らかである。『往生要集』におけるこの挿絵は、盲亀のたとえのごとく人が生きてブッダに会うことが難しいことを述べ、常に阿弥陀仏に会い法を聞くことのできる極楽の素晴らしさを説く箇所のものである。*Karma* の設定では仏成道の瞬間の奇跡として地獄にいるカンダタが法を聞く。鈴木華邨は自分のなじみの図案の中でこのエピソードに合致する場面として聞法の図を用いたのであろう。この点、20年後にこの話を翻案した芥川龍之介が聞法の場面そのものを削除してしまったことと比較すると興味深い。この聞法の図においては、阿弥陀如来の光背から幾筋もの光が頂礼者に注ぐ。光は言葉であり、教えである。*Karma* の挿絵ではこれがブッダの化身である蜘蛛になっている。京都の金戒光明寺の山越しの阿弥陀像では、光背に五色の糸が結び付けられて、臨終者がそのもう片方をにぎったと言われている。*Karma* の枠物語では重傷を負った盗賊マハードウータが死に臨んで修行者パンタカに聞いた話がこの「蜘蛛の糸 (The Spider-web)」であるから、日本人の絵師の頭の中には「死にゆく凡夫に阿弥陀如来から救いの糸が垂らされるイメージ」が容易に浮かんだのである。

9) 「火の車」の聞き間違いか、印刷ミスであろう。

10) 中国の民間信仰であった「左右双童」が日本の六道絵において「人頭幢」に展開したことについては、拙稿（長尾2000、長尾2003a）を参照されたい。

【資料6】 *The Devil* より閻魔審判



MEIFU, THE DARK TRIBUNAL.
(Reproduced from a colored Japanese illustration in *Karma*)

【資料7】『往生要集』より閻魔審判



【資料8】 *The Devil* より蜘蛛の糸



BUDDHA EXTENDING HIS HELP TO A SUFFERER IN HELL.

The goodwill that a poor wretch had shown in his former life to a spider, his only good deed, serves him in hell as a means of escape. (Reproduced from a colored Japanese illustration in *Karma*.)

【資料9】『往生要集』より聞經の功德



5 長谷川商店のちりめん本 *Karma*

さて、*Karma* が雑誌 *The Open Court* 誌上に最初に発表されたのは1894年であり、これに少々の修正が加えられて、翌年東京で「ちりめん本」の単行本が発行された¹¹⁾。「ちりめん本」というのは布生地
のちりめんのように細かいしわ加工をした和紙の彩色絵本である。*Karma* の発行者、長谷川武次郎の
経営する長谷川商店は1885年にはじめて *Momotaro* など5篇の日本昔話のちりめん本を作成し、1893年
のシカゴの万国博覧会でこれを出品した¹²⁾。

そもそも武次郎の実家、西宮家は京橋でタバコや洋酒などを商う貿易商であった。美しい図案を印刷
してしわ加工した和紙はもともと武次郎の長兄が経営していた輸入食品店、明治屋が商品の包み紙に使
っていた。武次郎がこれを絵本に仕立てて輸出することを考案したらしい。武次郎は木版印刷の高い技
術を持つ印刷所を探し、小宮一族を知った。さらに優秀な刷り師でもあったこの娘、屋寿と結婚し、
共同で仕事を行うようになった。浮世絵で培った技術を用いて和紙に木版で挿絵を印刷し、これを今で
言うクレープ紙に加工し、金属活字で文字を印刷して美しい書物に仕立てたのである。こうして出版さ
れた「ちりめん本」の印刷物としてはチェンパレンやラフカディオ・ハーンなどが英訳した上記の日本
昔話の絵本シリーズがよく知られている。武次郎はこうしたお雇い外国人教師たちのほかにも宣教師た
ちや外交官たちとの人脈を持っており、こうした人々が翻訳者として彼の絵本に名を連ねた。こうして
作成されたちりめん本は万国博覧会に展示された他、箱根のホテルの売店で売られたりもした。また、
同じ文を単語リストとともに普通紙に印刷して英語教科書にしたりもした。

19世紀から20世紀にかけてたびたび行われた万国博覧会で、日本の事業家たちは競って自信作を出
品した。殖産興業をスローガンとする日本帝国にとっては、万国博覧会は輸出振興のための華麗なる
ショーケースであった。1890年の内国博覧会や1905年のポートランド博覧会で養殖真珠貝の標本を展
示していた御木本幸吉は1907年の東京勸業博覧会では真珠でできた軍配扇、1926年のフィラデルフィ
アの万国博覧会では真珠でできた五重塔を展示する。欧米諸国との間の経済格差は、商人にとっては
一躍大儲けのチャンスを与えてくれるものであった。ケイラスはこの東西文化の技術的セッションで
あるちりめん本を気に入り、自分の著作 *Karma* を長谷川商店から出版したいと考えて交渉を始めた。

この交渉のいきさつについてはシャーフ (Frederic A. Sharf) がケイラスと武次郎の往復書簡を解説
して解説している。その中から *Karma* 出版に関連する部分を以下に要約する。

ケイラスは1893年のシカゴ万博で長谷川武次郎のちりめん本を知った。この時彼は既に *Karma*
の原稿を持っており、1894年に印刷出版の契約を結んだ。長谷川武次郎は鈴木華邨に挿絵を依頼
したが、華邨がなじみのないインドの風俗を描くのに苦勞したので、挿絵はケイラスが最終的な
点検を行ってから使用されることになった。この点検に1894年の大半を費やしたが、ケイラスは

11) この初版本の1冊は現在国会図書館にあり、マイクロフィッシュにしたものをウェブ上でも閲覧できる (国会
図書館近代デジタルライブラリーから呼び出し可能)。

12) 長老派宣教師ウィリアム・コグズウェル・ホイットニー (William Cogswell Whitney) が1875年に商法講習所の
校長として招かれた当時武次郎が英語を学んでいたことはその娘クララが記録しているが、一橋大学の記録に
は在学は確認できないと言う (石澤, p. 217)。ちなみに、サンسكريットの文法書や森有礼との書簡往復で有
名な言語学者ウィリアム・ドワイト・ホイットニー (William Dwight Whitney) はコグズウェルの従兄である。
武次郎の初期の出版物に『訓点梵語』があるが、ひょっとするとこうした人脈からの依頼によるものだろうか。

クリスマスの販売シーズンを有効利用できるように1895年のはじめには本を受け取りたいと考えていた。ところが、ちりめん本の印刷製本にはケイラスが予想したよりもずっと長い工期がかかり、武次郎は7月になってようやく本を印刷し船便で送り出したため、到着は遅くなり、期待は裏切られた。ケイラスはこれを武次郎の配送の不手際のせいであるとして苦情を書き送った。また、ケイラスが承認した挿絵は縮めてちりめん本に加工すると小さすぎたとか、武次郎が発送前に小切手を現金化したがその後為替レートが変動したのでケイラス側が損をしたとかの不満をぶちまけた。ところが、12月28日に発送されたこの手紙は2月の終わりまで届かず、長谷川の返事は3月に出される。このやりとりで、二人は、第2版については表紙の絵を改訂してちりめん本ではなく平紙で制作することに合意し、結果的には、第2版は1896年に500部を平紙、1500部をちりめん本で制作した¹³⁾。代金は300円だった。

Karma の日本語版『因果の小車』の出版のために、ケイラスは釈宗演¹⁴⁾を实地連絡人として指名し、1896年7月に長谷川は鎌倉を訪ねた。長谷川がこの時、*The Gospel of Buddha* の翻訳を行っていた鈴木貞太郎と会ったことで、*Karma* の翻訳も大拙が行うことになった。大拙は1896年12月にシカゴに渡ったが¹⁵⁾、この時には大拙自身が、アメリカでの *The Gospel of Buddha* 販売用の鈴木華邨によるポスターのためし刷りを持参した。

創作仏教童話 *Karma* ははじめ、一切の挿絵を含まない形で雑誌 *The Open Court* に発表された。その後、これを単行本化するにあたり日本の絵師が挿絵画家に採用され、また、内容にも多少の変更が加えられたことはよく知られている。しかし、シャーフがケイラスと長谷川武次郎の往復書簡をもとに解明しているこの出版の経緯を見れば、この単行本化に際しての変更シカゴ万博と同時開催された世界宗教会議およびそこで知り合った鎌倉建長寺管長、釈宗演とのやりとりが影響を与えていたことは想像に難くないのである。

補足 鈴木華邨^{かそん}について

さて、単行本化の際に挿絵画家として採用された鈴木華邨 (1860-1919) についてはあまり情報がないが、現在判明している限りのことを整理しておこう。鈴木は絵師としては狩野派菊池容斎の孫弟子にあたる。この時代、気概のあった日本画家は積極的に西洋画の技法を学び鎖国時代には考えられなかったような国際的な活躍をしている。華邨は1876年、16才の時、米国独立百周年記念のフィラデルフィア万国博覧会の事務局図課雇いとなった。この時彼が面識を持った納富介次郎^{のうとみかいじろう} (1844-1918) は「日本の独創的な工芸品の輸出が富国の道である」と考え、香蘭社を組織して日本の有田焼を万博で紹介している。納富が金沢工業学校の初代校長に任命された際には鈴木華邨は教員として東京から呼ば

13) この第2版の平紙本の1冊は京都の国際日本文化研究所にある。また、ちりめん本の1冊は国会図書館東京本館にある。

14) シャーフは Shaku Goen としているが、これは Soen (宗演) の間違いである。

15) この渡米についてシャーフは、友人である鈴木貞太郎がケイラスに会いに来るときに原画を持参した、としている。しかし、脚注7にも示したが、この時の大拙とケイラスの関係はまだそのようなものではない。インドへ渡りたいと考えていた大拙のことを、「東京帝国大学の学生」というふれこみで釈宗演がケイラスに売り込んだのである。一方、アメリカ移住後に出版された『因果の小車』の緒言の中で大拙は、「友人、釈宗活、芦野慶三郎、長谷川武次郎、三君の尽力を謝す」とし、若い3人に親しみを込めた謝意を述べている。

れた。また、大隈重信の下野によって納富が校長を解任された10日後に、納富も教員職を辞したことから、2人の親交の深さがうかがえる。

納富介次郎は後に神道実行協会初代館長となる柴田花守の次男として佐賀県小城で生まれた¹⁶⁾。16才で納富家の養子となり、十代のころに大隈重信らとの交遊を始める。19才で高杉晋作らとともに千歳丸従者として上海に渡航したのを皮切りに、ウィーン万国博覧会審査官として渡欧し、また、上述のフィラデルフィア万国博覧会の事務官に再任されるなどして、たびたび海外を訪れた。英語の design を「図案」と翻訳して日本にその概念を紹介したのは納富介次郎であり、電信柱のデザインなど工業図案を始めた人としても知られている。

この納富の実家を継いだ長兄、柴田礼一は神道家としてシカゴの世界宗教会議に出席し、日本神道についての講演を行っている。この1893年の万博に鈴木華邨が関わっていたのかどうか、また、渡米したのかどうかを知りたいと思っているが、確認できていない。

さて、華邨が *Karma* の挿絵を担当したのは金沢工業学校の教諭を退いた後、35歳の時であった。華邨は、いわゆる「ちりめん本」の挿絵としては、1887年のチェンバレン訳 *My Lord bag-o'-Rice* (俵の藤太) をはじめとして既に数回担当していたので、宗教会議が *Karma* の挿絵を担当したきっかけだったかどうかはわからない。ただ、納富との交際に目を向けると、万国博覧会を通じて不思議な縁があったことは確かである。

おわりに

チェンバレンやラフカディオ・ハーンが目にした明治の日本はたしかに素朴で美しかったかもしれない。そのような近代化以前の日本を振り返って、「誇り高き日本人」をあえて標榜するという現在のやりもあるようである。しかし、忘れてならないのは、この当時、彼我の間には「圧倒的な文明力の格差」が横たわっていたことである。鈴木大拙は「欧米には大抵の都市に大きい公共の図書館があるけれども、日本には無い。だから日本では少し学問をしようという人は財産を投げうって書物を買わなければならない」と嘆いている（明治33年8月9日付け宗演宛書簡）。一方、ケイラスが編集長を務めた雑誌 *The Open Court* には亜鉛加工業で財をなした舅、ヘゲラーが潤沢な資金を提供していた。

ケイラスをはじめとする欧米の知識人は、多かれ少なかれこのような経済力の差を背景に世界の文物を収集し、研究した。その原動力はギリシャ以来の真理を探究する哲学の歴史の中に新たな局面を拓きたいという意味である。それゆえ、彼らの多くは未知の世界を見聞するために国境を越えた。科学技術の発展と社会資本の整備が先進国を豊かにし、その豊かさの中で教育を受けた国民がさらにその国を富ませていくという構図の中で、身につけた教養は揺るぎない力だったのである。

19世紀末から20世紀初頭という時代を背景に、ケイラスは国境を越え宗派にもとらわれず普遍的に人類に益する「科学的宗教」を打ちたてようとした。彼はキリスト教の教会を否定したが無神論者ではなかったし、ましてや天台宗に改宗したフェノロサのような仏教徒でもなかった。聖書という書物の神聖を否定し仏教経典を熱心に研究したためにたまたま日本の仏教徒の信頼を得たが、その根底には「父なる神」への絶対的な信仰があり、それこそが彼が「真理」を追究する原動力になっていたと

16) 以下の納富介次郎の事跡については「石川県立工業高校同窓会」のホームページを参照した。

いえる。神聖なるものは世界に偏在しており、世界の宗教の聖典の中にはそれらの形跡がなんらかの形で残されていると考えたからこそ、それらを研究したのである。

Karma は宗派宗教が異なり文化背景が違っても真理を共有することはできると考えたケイラスの実験作であった。現実にはそこには彼我の越え難い壁が存在しており、お互いの違いが明らかになるにつれて苛立ちも生まれたが、技術と経済の分野での容赦のない折衝は次々と新しい文学的業績を生み出し、そこにまた新しい文化が生まれたのである。横須賀の古本屋で立ち読みした本をもとに『蜘蛛の糸』を書いたととぼけている芥川龍之介は、周知のように東京帝国大学の英文科を卒業している。私は東北大学の図書館で旧制高校の蔵書印のある *The Open Court* を閲覧した。京都大学ではこの時代のオープンコート社の献本の印のある書物を何冊も見つめた。芥川が古本屋でこの美しい挿絵の本を手にとったとしてもそれは偶然ではない。帝大の卒業生にとってオープンコート社の本は教科書であり参考書であったのだ。

ケイラスや大拙の仕事を評価したり、芥川作品の良し悪しを批評したりすることについて筆者は興味がなく、その点に関しては読者の自由な感想をまちたい。ただ、人間の交流が時には誤解の上に成り立ち、それでも何がしかの形に発展していくという事実は非常に興味深いと感じている。

使用テキスト

Paul Carus, *Karma*

雑誌掲載版 (1894) *The Open Court*, vol. 368, Chicago (大阪体育大学所蔵本)

単行本 第1版 (1895) 長谷川商店、東京 (国会図書館所蔵本)

第2版 (1896) 長谷川商店、東京

(ちりめん本として、国会図書館所蔵本がある。これはマイクロフィッシュ化されたものの原本とは別のものである。また、平紙本の京都国際日本文化研究所所蔵本がある)

第3版 (1897) 長谷川商店、東京 (大阪体育大学所蔵本)

日本語訳 ポール、ケラス著、釈宗演校閲、鈴木貞太郎訳 (1898) 『因果の小車』

長谷川商店、東京 (国会図書館所蔵本)

Paul Carus (1900) *The History of the Devil and the Idea of Evil*

実際に参照したのは1974年に改版したオープン・コート社版と、より印刷の鮮明なベル出版社版である。

「増一阿含経」(4世紀後半の成立と推定されている)『大正新修大蔵経』vol. 2 所収、大蔵出版、pp. 549-830 (校訂本の初版は1919年)

平かな絵入り『往生要集』(1913)、京都風祥堂、第8版 (1921)

参考文献

Adolf Bastian (1887) *Ethnologisches Bilderbuch : mit erklärendem Text ; 25 Tafeln, davon 6 in Farbendruck, 3 in Lichtdruck ; zugleich als Illustrationen. beigegeben zu dem Werke: Die Welt in ihren Spiegelungen unter dem Wandel des Völkergedankens*, Ernst Siegfried Mitter & Sohn Königliche Hofbuchhandlung, Berlin. 初版本のゼロックスを参照した。

Paul Carus (1893) *The Religion of Science*, The Open Court Publishing Company, Chicago. 参照したのはロンドンの代理店による1899年版である。

- ポール・ケーラス著、姉崎正治校閲、長谷川誠也訳（1899）『科学的宗教』鴻盟社、東京
- Paul Carus（1894）*The Gospel of Buddha*, The Open Court Publishing Company, Chicago
- Paul Carus（1896）*Nirvāna*, The Open Court Publishing Company, Chicago
- Paul Carus（1897）*Buddhism and its Christian Critics*, pp. 165-236
- 初出は Paul Carus（1894）“Buddhism and Christianity,” *The Monist*, vol.5, No.1, 1894-10, pp.65-103 であるが入手できなかったため上記単行本によった。鈴木大拙による抄訳（「翻訳小篇」『鈴木大拙全集』第26巻、pp. 58-62）にも同様の文章があるので、当初の雑誌論文の記事にも大きな違いはないだろうと考えた。
- Teitaro Suzuki and Dr. Paul Carus translated（1906）*T'ai-Shang Kan-Ying P'ien*, The Open Court Publishing Company, Chicago
- J. Estlin（1895）“Review of the Gospel of Buddha by P. Carus,” *New World* 4, pp. 157-158
- H.F. Fullenwider（1987）“The Onion and the Spiderweb: Paul Carus’ *Karma* and Other Literary Variants of Grimms’ *Sankt Peters Mutter*（Bolte / Polívka, num. 221）,” *Fabula* 28, pp. 320-326
- Harold Henderson（1993）*Catalyst for Controversy, Paul Carus of Open Court*, Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardsville
- Frederic A. Sharf（1994）*Takejiro Hasegawa—Meiji Japan’s preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books*, Peobody Essex museum collections, vol. 130, 1994-10
- 芥川龍之介（1916）「蜘蛛の糸」（『赤い鳥』所収）、東京
- 石澤小枝子（2004）『ちりめん本のすべて』三弥井書店、東京
- 井上禪定（2000）『釈宗演伝』禅文化研究所、京都
- 小林信彦（2005a）「*Sankt Peters Mutter*（Bolte / Polívka, 221）—非キリスト教文献に取り上げられた可能性—」『〔桃山学院大学〕ワーキング・ペーパー・シリーズ』第30号
- 小林信彦（2005b）「ポール・ケーラスの『クモの巣』—意識下に沈んでいた素材—」『〔桃山学院大学〕総合研究所紀要』第31巻1、pp. 65-85
- 小林信彦（2006）「『クモの巣』が『聖ペテロの母』のヴァリエントである可能性—フレンワイダー批判—」『〔桃山学院大学〕人間科学』30号、pp. 99-128
- 長尾佳代子（2000）「俱生神の展開」『仏教文化』第10号、pp. 43-70
- 長尾佳代子「俱生神のフダ」（2003a）『舞鶴工業高等専門学校紀要』第38号、pp. 137-147
- 長尾佳代子（2003b）「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題—ポール・ケーラスが『カルマ』で言おうとしたこと—」『仏教文学』第27号、pp. 161-172
- 西村恵信（1993）『鈴木大拙の原風景』大蔵出版、東京
- 宮坂覺（1979）「『蜘蛛の糸』出典考ノート—CHRIST LEGENDSへのメモを手懸りとして—」『香椎蕩』第25号。関口安義編（1999）『芥川龍之介作品論集成、蜘蛛の糸、児童文学の世界』に再録されたものを参照した。
- 山口静一（1963）「『蜘蛛の糸』とその材源に関する覚書き」『成城文芸』第32号、pp. 9-27
- 「石川県立工業高校同窓会」〈初代校長納富次郎〉
- (<http://www.ishikawa-c.ed.jp/~kenkoh/dousoukai/bokounoayumi/noutomi/noutomi.htm>, 2005.10.31)
- （本稿は平成17年度文部科学省科学研究費の助成によるものである）